

大川欣一新任助教授の紹介

高 松 英 雄

大川欣一君は青森県津軽の出身。昭和35年3月弘前大学医学部を卒業した。同君はその前年に既に組織化学の勉学に志し、卒業と同時に京都大学医学部附属病院で実地修練を行った。翌昭和36年4月1日、京都大学結核胸部疾患研究所（当時は結核研究所）の細胞化学部（当時は病理学部）の助手となり、一般病理学の基礎的勉学を行い、同時に、組織化学細胞化学を学んだ。昭41年4月講師となり同年ピッツバーグ大学の病理学教室に、エマヌエルフアーバー教授に師事した。同教授は又、生化学の講座を併せて担当されておる特異な方であるので、化学的な方面の研究にも心掛けた。昭和43年7月帰国し、昭和44年2月よりフランス国立分子生物学

研究所に客員研究員として留学した。膜酵素一般について学ぶところがあった。昭和44年10月帰国した。

大川助教授の研究には多数のものがあるがその中では、酸化的酵素類の活性の脂質必要性に関する一群の研究があるが、これは学位論文ともなっているもので、着眼点が優れ、又、論理明快で、実際的にも有用な研究であり、私は今日も尚価値高いものと考える。

大川助教授は本籍こそ京都に移したが、東北弁だけは相変わらずで御愛嬌、外国で学んだ事柄が最近ぼつぼつ結実しつつあるように思える。今後ますます精進される事を期待する。